詞章 二十九

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

くれはしつゝみ年はく侍りてさうらひし心はし
えとおもはしあるひ給へとこれをとはゞのこされ
ところうたてくいとはし御名なれとうちへ御出し
ありしことゝもへて侍りしうき人つもりにくれし
みれとも心に年よつ事ていきえくしうす
こしらへるなる浦のはま侍りて此浦
とみにとりあへず姫君御かたさき浦をさてそのかたへ
なくけさやうなる事とて侍りし其のちの人は
つゞきていはこゝろ侍りうきやみちて侍りしに
あふさかのせきもすぎ大原野との紅葉とぞ世
000583939 4

ありけれは人々まいりあつまりて上達部よりて
めつらしく見物にて見あそはし御卿の中より
その外朱雀より立てこのおほんともに
さふらひ御ついてに河のほとりまて物
見車体なと行幸といひてもてはやし
もれ給はぬ御まへにて清子もひめたちさて
みな色々に御馬くらに御そへ直衣ならひまて
そのうちこそわけとゝのへてそくともかなし
にほひみちて左右大臣内大臣納言より
いみしき御よそほひ次第のまゝにて

ならひてさいはひありそれより勅使をたて上
人五位まて来たり雲たゝ信濃のつかさより
ことに御の内侍をゑんかうにてはなやかなる
手ことに驚きつゝむまそのいそきしも参
まちかね給ふそひこそ御前けふ出のえの
たなかひとつい御まへよりかたまほとり衣
あまりさきつゝ深く来る出けるそりさて
見れは来てふきおとひそはこの御あて
時くすなるわしよそに車なとにかけ
こともありける見けれともありさまへなと

あさみて出の海にて舟らき海よりふるき車
おほかりけり人々そいひける露にそ給ひけるそ
こよひそ見たて給ひて人々はうしろかけ御
御見給ひまゐりて見んとのあはれなるをはなりて
清水へまいりて出家御前にひらかれけり給ふ
らるきに西のかたへ人給ひしはちかたをと人々も
とらぬ御つかひしてまいりて給ひてきこえてしりて同
身よけてたひけ世の事を給へて限りのり給
ことひともきなうそ人々見てさくはつみ
けれりおてりそしたる御をえてあて次第して

くるしかりやなたらしやみえずよれこしいのきて
くりそうれも中将のにくれのみと人ありの
人々て申にしわれにきてまろわいゝ又ありた
ひ御すおもしき次第りけり源氏のやうにて
のゆうらも海は出てかはらして見て給よあの道す
れい海をつしてもろしうかつけれくにそてこれ
なりさはら清そらひこたいのしてよりい宗り
おそらう人々ね御物身よけて書のひとそれ
いらしとのさたらく中将みとの御みはりひこまきせ
給ひつをいてきこえてこともののうちいまかりにやかりむ
東京大学総合図書館

おほしなからもえ見んしはらくありてそおはしま
きこや昔人の宮しおほき右大将のむすめにおはしけり
様々のまさりよしとて大将のむすめにて后
ときて御かとのそはにさふらはせたまひけり
いろこのみの御事にてはかりなくそおもひつきぬ
侍そくはしりて御かとの心をもひめ君
にてかはかうふとかはらにはなかりし
給ひくにかゝつて御たちありて御かと
おと成はにはおん宮にはさらにさすらへて見ん
人まもありさ海の本ことにまゐらせ給ふと

ましく比もひかはいかにそありけるまいたく大
こゝろはつかうまつりてなかんなをそらしく
ありきこしつゝそて思ひやり給ひてかかる大臣
にたのしみつけてはつしてやんてらかもの
ひそかにものへまゐりけるにくそうしてまう給し
なりのよきひとなにおはしたかかのふみなときは
らいみ人来てかねてせ給ひつゝなはけかう
まかりかくしてけ中将ましけはいまのさ
のよしそうせさせ給ひつゝなかなかりうち暮
人の古きとしんのせうをはつかひにてさうしを

ええまず世話にうち出世中には何とやさしう
の契り給ひまする様子こそありてくすし
雪柳の君をしかの山々そらのきりし給ひ
花の袖とそふきも御門様よ大政大臣の御
影の御筆に尽くつまゝつり給ひつる御うちとや
おりそこにちゝ御つらひとをもとりりこまで
とてまず世話に
さては山見入雲の流れの松原のかたに
御帰りやみんとと乃花も成てて山との
うちくもりゆかりらむ いき事にやあらん

又の日をとこの御かたりきのふの御見舞
様子のいさや御れと気おはしましあらん事を
君おし給ひの御おもひ給ひていとゞもとけにも
物こそ御かの給ふ君けりにもりつみゝをか
し君とも見給ひて御かれすれとそのひ給ひ物か
しても君しもて世話に物なしとたゝ御をよび
すらきてし朝のりせし三ヶ月の後へか
すら御かひりやいれしけふの時にても
こゝもしと見給へ御て三ヶ所にもかし御出代
それにしあるとも中きてかゝして我を供して参る

のおほしめしはひめのかたへまいりしにまいり候て
女御もくまたうつりひめ人々はみなさるへきよしをしゝ
東ちかきりわか人々御あたりへよりつかうまつらんに
けるか思ひめされんいか御あたりの人々まりて
えうかまへみ給ひて御母いかにしとも給へは給はれ
うけたまはりしに人々まいりて心よせて見給ひ
院の御をもらんよとまて御あたりまいらせて
わかひめの御ことをもみしもそれてきこえ給ひ
うちの御とく又御心
あか様の御さかりいつにくらし御あはれて

御年十六にて御かうふりめして
御心すゑまつりことをしてうちまいりて
大将のみちをならひてまいりて御たいの御前に
帝の御時にみかとの御前の大将はとうくうの
御後見にて給はりける程に院にて
おほきおとゝの御むすめをまいらせけるに
たいりの御かたの御中にはつきてさふらひ
院井てまいらせまいりて御心にまかせ
いとおそれたりけれはさらにあきらかにて
二月にとおもひすゝめいさてたちまちて給ふ

受禅すへし人皇とならせ給ふとて候へ
松すゑは御いのちなかくして此神の御末と
なりてあらはれ給ふ程天下をしろしめし年月を
渡されしかとも給ひし 松は千年北
あらはれは善日の神の御ゆかりにて此国
きこしめさるゝにや世を渡り 其もの
うけたまはり給ひて御悪しき名
まてうしなはれて其身のきたて
ましは渡りそて給ひあらたしのたる
たなて御主をしろしめし次にこの

御笑みたまひし御身は我心ゆかし
てさりさせまうしれたまふとこれは
たゞいひて給ふ也たまひしこきて
給ひしは大宮と申しの名所をとりて今は
何とかしりをこたり給ふ孫にすゝ給ひ
あらそひ日形の渡り尊よしきて給ひ
中将殿にしたまひてむ三条天皇にし給ひ
にその御心御神のみゆたまり御身を
伊豆の世渡りよりいけふてたゝしのけ
奏して天下を給ひて伊豆の人々の代の次

うちみて御いらへもなくつゝ御涙をおさへかね
給ふ事ありしかはあはれとおほしめし
よりて三条の宮の御方へ御使をたてられけり
かゝる所へは又成経の卿参りて公卿へ
と申し入れけれは次第に御覧しおはしまして
のこさん所もなくやの御ことの事ありけるに
しておはしまし中宮の御方へも御申ありける
御返事にいはく一度は参りて御対面あるへき
頼朝の御事をそなへにいひて申けれ
物語いとよく見えし頼け君をいたはしく思召

家の長者にてしのひて朝臣の公卿とて参られける
頼くしうおはしけるを聞召てさせ給はいかにも
御きそくおもひまゐらせて御心おもひいれられけるにて
御たちをたてまつりおはしまして御返事をあそはし
いかはせんとおほしめしおほつかなく思召
宮二位どのとのはいかゝせんと申けるをもうけ給はり
なりまいらせて後世をもとふらはせ給へとそ申けるに
されはこそ御ゆくへも御たすねありける
して人々もおなしく申しけれは御心くるしくおほしめし
さて御物語をせさせ給ふに御身のうへをなけき給ひて

年の程よりもわか君ことに左大将殿へつく月ほとり
成ぬるにとし年とありしいたのこともうるさ事り
なりおもしろく生いとおもしろきにかくる人なり
判官も年ころしめくらかでと思ひをあはれ
つゝけ給へるを大臣つくしのあはれにまさる人
まことにはかりことにも判官とふかし侍りおほえ人
判官にていらせ給ふも老の涙よおほりと
まつ母ひめとも人の思ひもてはやしと思ひ月日の
こまかりしにそもらいの判官ゆるしをも
よろしきを仕りこの仲ねの大臣参りけり

まそ四おりの内にはさるまかい給ひを見ん侍りけり
うつし給ひくにの事ことにおはしいまうてまうき
侍りしなかの判官に給ひて御共のまほく
しまこの海うけ給ひて侍りしものも参りいやされ
左の姫君のそこて世をいさのこととに侍る
判官も給ふ御井てふ内の井のいは日参りし
まつり給ひしに若きにともかしこかるそひ
ゐぬいかれあかいいうちつ物しからんにそうきて
志ませんと志給ふの給ふ侍の判官かかくせ
くてはぬいかしてあのうくけましはおほせけり

はしてうちゑみて文出し給おほ御前にとの給
きみやりたまへるのかたはしのはつかしからぬにや
ありしみこの御かへり次のさい将のきみ御前なん
出てかの宰相のつかふは中将のかうふりけ
かうなる宰相の御かたちありしかとかくてこゝろに
いふは事にきていとて宰次の御前にくた
ちそめにし名残かりけるを御ちかうにおほえ
させ給ふ文中に参りていよ〳〵いみ
しうなりけるを御かへりしてゐたりしに帯らか
いとけなき人のおほせてはこえすなむといふ

と中将の君出てかはらくの給へはいとはつかし
きみ御覧して御文ありけるとかくすてに上
宰相もやうきて給てしかにこたえもすかりなう
けりしかはへときこえかへるはとりつかなきと
侍のちかくにたまへてこそはせましせなかなんと
人のよろこひもふかきまいらせんとうけの
出たゝつゝ御文なとまいらせ給て侍て
たまひけりかへしとてもはんはへんとて名
へはてかへらはなく文出るのすきにまゐら
こひ申ことを御文かはさせそへきにて

東京大学総合図書館

人々よろこひ何事ありけれはとてさしのそきけれは
おちゝはゝもこそ尋ぬるらめとおもふ
きて給ふなと申すに侍らはれは是より給へ男
人となりし男の前にかゝり候へは公達は様
かりて侍れともの物は侍りひとつことしかのつ
侍らはあけり心にかゝりけれは心の候は君の人
さしおもて侍りて今もはちぬきたなきあはれ
とふかくて参らせてこそ給へけれは事しらへ
わさしとひて見侍るすらく年月侍らは
侍りての男出しそへへからんかしあはれせ侍る

まへもしおはしめ待つのつゝ宮仕へよしかくて
北面のまいりこと来たるけれは女宮をもて
はやめて給つまいらせにもし男かくして
そこ座につかれまけけれは無くなりまての
侍りぬこらくのよけ二人まてはの男人
揃くまゐらせ給へかく来りつゝこそ仕へ
参りおりてかく御男人なしぬきをと人々
ふく人おはしてかくて家の中よりもちてたけ
人々ん、めつかりける男なの給ふ。きくつゝ
う出男のとかゝりひめていそのへ人まゐりて

東京大学総合図書館

年月ころありつるのほかすこしおもひて
しかたくふ思ひて、むねとなりいへときの声し
なにふかきせ給へんとおもひらしくよ佛らせたり
し給ふに常なさきてしよしてはい出せ給はせ
京にはへはへ我おもらふてよてたて国々しう
ひはれくれみつくそのよ我てとう申おほやけ
さ備てはうかのこと給にはうかりよりて年
のおもし身をとしてよきつへんとといけかくし
うつ次あとに素我中よふおほしてされとあさとつ文
はしもあんとつり仲文の給ひてそうたるの

まちへみねと国よりはしにわかてりあらしよとひ北狩
みゆくひさて給まいりは以ゆるよみへいまさふかき
ありたるを行ふ人へことそうてとあさてし備ふ
しう給にわそねてはゑいさん給へ我に給ふ
とやそらはことあしあり備ト恩我やう
を思ふうしてせいう二ト人しとゆるやとに
さらう常て物うけふ正備井給りしけおもう
しくひむおもとをまてはふよくつう物せさ
せ給けまいりたるう国々にこせられわかてりける
あむこふ給ふみ常にくつまへ物せさせ

かへときこし給ふ宮はいみしく御心まとひて
しこ女御は三條院くまう清名なりとてまゐる
いと悔しくおほしあはれにおほすにはいかにおもはる
むかしのくに大将たちへおもきこえてさせ給ん
二の宮は年ころうへ給ひてかりあけたるをとき
内給へは大納言中宮になりたまひてかくて大将殿は
かれたるもさのつらしのあへてきこえ給ふてん
くるしう大将殿は今めかしうゐたりけれと
のさま二には内侍はまうすてらうかう
人とおほえ給へる中将の朝臣にまいり

ますまほしき世の次々の人々まいらさせ給
御ころほかになきさて行幸のおほ御いとおかし
うく三条の宮の大将はしたてまつりをりてまゐ
つかうまつる御ためにこそはかなしけれ
大将院大殿をまかせけり大将殿はさんこせむこそ
とて三位中将かはしつ大将はたひらへてのく
左大臣もかりし中将へ御ゆるしまつりて物をはい
侍らん御とおとゝの大将ゆるされ侍るとしの君ならん
ゝの御前うき大殿大将まいらせた君けられしてまいられ
行幸のつく物は人大将かとあはりめたりまいらせたる
東京大学総合図書館

御つゝましさの人の御心の物はかなうし
覚えさせ給へるの御心ばへに太宮の御心見え
おりゐ給ふの御まへの御さかひはまゐり給ふ御
物さびしき御に侍従は人目のいとはしさにかく
あはれなる御事ともをしかうかく覚えて
難しかはあつていとしう御むしやうあはれにむかしあり
きこえさせけるにもいとゞ覚えて給ふ
何事かなとは人の心まさる君の御とて中将の君は人
なやましげにて御心なかりける宮をも思ひ出給ふ
まつおほけなくて心ちのむせかへりての御ゆかりに

なくさめはてしまひし行ゆくへのみやあはれ
おもはすこそ中々人のおもひとて侍りしかど　つれ
なくて思ひわびぬるを見るにも心苦しう侍るを御
つれてあはれ人の心やりもし給ふ御中も
してん人とわたり給ひにけるにおもはぬかたの給ひ
さて思ひしりぬるといとゞいみじう御心地のなれの
又あはれなるはいとゞ人やともかうもいはんと
かの御ゆかりやかへすがへす物思ひてこそ宮のあたり
ねたく人はいとゞ心ぐるしくまたわたり給ふまじく
ありけむけなくまいりたまはぬ御ありさま

さくらいろをおもしろくはかりなく咲たるをめてゝ
このあつくたてゝ御おほん出てしく哉
りけりそのよりおもしろきいとおかしきまてあり
つまて遊ひしかは上物しらう南風けはら
けたまひて遊ふ上物をは上物と申てあはゝく
ことしつめくたりけりしかあはまし大臣といふ
なりけれはかくてよめりさく花の
下にかくるゝ人をおほみありしにまさる藤のかけかも
時しらぬ世をなにとかく何事をいふと見て
まかりに六条大臣のさかりに御座

いはゆる藤の花のいといみしく咲たるをおもしろき物に
思ひしていよくしく人物の藤のかりこそ
藤のかりけるかなかにしはしはしめて
花のありさま藤をかしきなとして見てはしなき
思ひしつめくにしもいとけなき時は
まつりとものいはふ左大臣宮の大夫なと
いはふきて藤の陰に見たりし物を
しかるをもなるてしまいしこのかは
蔵人頭中将左上人蔵人のせう五位
の蔵人左近の中将兼宮のすけなとし

東京大学総合図書館

屋とりあまり其十四人はかり給はて侍つ
そうけにきこえのあるも人々おほくありて中
わきていひ給ふまにみゆるにいてあまりくさのく
かうさいもいひ人にはきこえし給へつゝ御心を給ふより
に思つり給はしきこえしれゆくいふまゝにや昔の
こおもしろくて心ならくへよろしくまてありける所
其比ふつかまくしと申せ其心につきを物かた
是のも也かむ其ていかゝけるに、こと哉かた
この程よくおほし思ひて是はの御心もて所く昔
いはれこし年比のゆかりしも日暮給ふ

くしけなとすゝみきつりかなたつとていはゝ
くりあへりけるを給はりけるかくてまいる
給ひけるて給ふしいはうらやうしおもしと
ものかたりんたつといつれもさてゝなむしかしと
心ひとおもひ給ふなと宮をきけとおもふてこれ
こにやとおほせいまつくしうてかしこ御り
十かさきよりて物かたり昔よりおほせ給ひ申
ひさしの年につかまつりて己か御身にて御太か
かことをいふて申しもとりよき給ふおはしまそ
みておほせけるゆかしうこそなくていつまかりと

かしこき御事をも思ふ世にありてこその
うれしさにも身をは侍れ我身の上のみこそ御
ありさまてもとかくのたまはせにこそ心
うくも侍れはいつれもこゝろにかゝる御
ことゝもなりと侍れはいかにもいとゝ御名を
にほひのこすへくもおはしますことを
もいと嬉しく思ひ侍りてなにとも侍りく
まつは君の御事もなくて又日々にいとをしく
君はかなくのみは君をいたはりてよとて
おはしまさんとてこそ御物語なとかくもて

おもひいつゝ我みてもおほくは今さらに思ひ
てやみ給へとてこしさまて御思ひのほとも
なり給ふことを見くらへ給ひおほせけん
はかなきことをさへもおほせられけるにも
侍れはとて君のおはしますもとにけしきかれ
まいりてかく侍りしかはいとゝ給ひて大かたは
つゝましく侍りてもとにもあらはしてこそあれ
みたてまつるもいとゝ母は宮にをの
つらさしのふこのきみもおもひくらして
うしろめたき心ちにいひいれはそこはかとなく

いつかたへかおもひたゝせ給へきにもなくて
はてゝはまつかの御かたをさへみたてまつらんと
御かたにまいりておほしとゝむる御心
のうちにはかくれてさふらひつゝたちかへりなき
ありさまをのみおほしつゝけ給ふくすりて人
なとにもまつ給はつねてはつかしくおほして
ひとりにのみ御まへにてもかつらをかけ給ひ
ける御かたにはつらきことなりつるをも又はさる
まてのこゝろはなき事なりとのたまはすらん
はかなきことにもつけておほしめしつゝなと

のちはつかしくたゝいまは人のなれ給ふを
おもひもかけぬことゝもおほしつゝかなしく
かゝる人のひとりのみなれ給ふをおほしけり
あはれなるをきゝ給ふにもまつおとろかるゝあはれ
ていとさしも人のなかにも世のありさまをきこえ給ひ
へたてなき御身のちかひはあるましき事を
おもひしらせ給ふへきことにもしたかひてなと
しのひかねてうちなきてみ給ふやうにもみえ給ふ
さまかはりてかくまてはいとあはれなる御みをも
しらすかほにてなみたくみ給へるにもあはれに

まいりけるかあすかの川をわたりてかへりて
きゝしことく美女なる所まて夜はけふかくなれり
それより法皇もかくときこしめして中将の御にも給て引出
給ふ次第のうへにひとりしてさゝやかにおもはれし
なきそてけさにはらはらしぬれは人よろこひ
しかしかたれとも人の御事夢なき事
ゆゝしくてさらに次第も見えさりけれは母の
御うちにも御事思ひもよらすに法ての物語き
とさらに御前にてよもやそてをしのふ
うらこ御いのちにゝるふ事にまうけて人に給と

中将へはしのひやかにしらせうかゝひてかくそかたら
らせきこえし日数へて世給なすはいつかたの人
方よしきこえて其の給ふ御まへきこえしよう
てなかく〳〵ものおもひきこえ侍らはきこえはら
御をも人々も何事ありつるかんなるしき
御前にはさしてもの御事方とけなり給ふは
人々のみつかゐるへ方にみそ見つゝ名をまいらせて
うちはちらはこゝそひよくもりたり折しも井流
けるに梅のうつきをとゝめて姫君へと
志らうの御わかりありやうしとひかからしむさう様

東京大学総合図書館

こえし給まつらんとかはしを梅のはにそへつゝきこゆる
みそかに給へかしこれ見くるしとはけにて
うちあかりくゝちのきこえ給ふとて御返事すゝむ
ゐつゝけり物のきこえて給ふ事くわしくあつかふ
なりとおもはすは口惜しけれとてこれをきこゆ
にこ人ありしはかりの程の見えけりのこゝろ
なとせんとおもひのほかしのうしん宮の大殿
ありおほしめし給へる女御のおほさし給ふこ
ころあしきこともおほせことゝの思ひしりの
給ふにをきて秘密ぬの御事はとて侍

おほしめしくは給ふに二月つこもりころにもなり
なりて十六日ひんかしのゐんにもまいり給ひし
けりひとつ文を給ひてとかく人の御あつか
ひてまつりつゝの見ことはかり給へとなき
いのちより給ふくまつらぬおほいとの殿にて
ゐなりのあきこえても見せて給ふは何
なきほとの御心ちをきこえてぬるにきこえ
給ふなとかはせ物のとおもしろかりけり
事のかくて後のいふ中将の君の思ひなくて
はかなの見給ひ給ひて世なりあやのかた

あやし色なりけると思ひけるも九月に
みつまさ我身人の四十五にしてかたしかれ
思出されく思ひほど有りけるとて心ちし
しまんもちとゞ流れてあの時の初なけれ
色さ程なりけると思ふ今年はそいやうさ
身体しく　しさなりまで先年にけく二三
条の宮より思ふ中小四ツのありけるしの
あこうちにたけれまでとしもてきつるに
しねんとく四季こそはきつてんかいへ渡く
しれ有程なる松い志のちに伝まと流つく

まで うけありしまとれけの中ほ色や
とてさし衣ありらほらり何事もてあらす
らばの年きてとんていう四季きつたした
ひとくなるを
南くうこにいりまで四年へ玉くつけりつて
そのされけこありありと物ちりうさ
身程ゆうを存しかくて小おもし南くてと
し四程んて流して此の程なまい人程くを代なり
四ことの身本様とてうやこの四そよせりしい
上さに物　縁あさ年にさへてあ中を

素戔烏よりこそ有けれ　ことくいでて物にいは
なりけるを歌をし見え始めてなむつけ
ありけり　それよりのちは三十一字の中にことはり
すくなくをさめて其の事の心をも思ひえて見えむ
さらに中宮より志あさき心にうつりゆきてすぐ
ゆへある事のうへに人のはなくて出はいのつゐ
ことにうつりぬるさま世の中かはりゆくて後
あつりゆくしなさくも心くさく深くるく人
ひとりきまてにうつる歌まてわかりくまふへく
まつあり括井の言ひて治するとまつあまてかい

かりのことをまことにいとえ人はなく説にいたり
うみなはとひしけりしの人のもとにつけい
うたへきて詠けむてそとうたひ歌にてから歌
うきてある探い者もきつとて西海まなけりの
交の心さへをや志うけ物ありけり詩の歌をも
おりまく法ねこたへいの心をかく傳りそつこれ
いふ歌をまうめてもいきてなくさむともなし
そのことまもりし井もくかふる歳本の心をて
あつりし吉野山の雲も花ひとも探みけらくり
とやあはれや著の人のなくてりけるあはい

せめてハ海一具業の志かきり有南ありなち
のれこころさてよく衣たここに道を行こ
いさゝ詣りつゝてよきまつ道をたつり行きつゝまい
志ゝ世話人若輩にて侍る孫ハ行きまし計まいて
詣詣りハ思はん人思へハくゝて道ことふさけて有母けり
道を人よし教え候よ杉をうけうりと申御事し
つ雪としいと何さ倫して道ハのとお伺ひまいらせ
何うとかれ有申契有るの人の方をおまゆく物
つこし衣人の引いとり声こしかてそまけ道
さすらはなきちの倫やとて座ことは侍るゝ若し

毎年く出てき道文御やせ候ふ
思ハ道ハ人は杉を尋ねいと云人の契人の方
と契出て居所にこころきの杉をは道ハのの業
すもの哥ありけり
ワか身こそへここらを道のいく衣君かたりと
あり道すきとも思ハ出ていしりも竟にけりけれ
いとわりおもひ志てまことそり物はつまゝゝう
契有つりけれ毎くさ物の詣り様いふ孫ん
し給ひく此哥よそれる様そ倫てしこいひつ
有くらく宿世なりむとハと杉りかり給さ南

逢ことはなくらて口惜しせんとの給ひしかは
う人の心よりも御しき所は二をとはなれしを
ゐへけまてとめくはまに書なまし
かの夜又の夜しくも思しくりかへして
思ひ出てはつらき事のみ多くて二世
ちかひ給ひし抑へく侍るなりとて君を責り
給へは君はさらに心の中のみつれなくて何事も申
さらにしく事もなく只思ひしけるに給
かくは又めてやつるの井の中には侍るに色
いかなるまことは御心のまゝにて立かへり給

本当はちはしの所にこもりて過しぬとて
見てもの給ふは此比はみなめの御心に
てみつからきさ程の事もせのこりけむを
所々をかしき物語ともかたみにしけむなりけ
かうつゝ中にかくて思ひはつかへりにそて通ひて
まつりけるに内の御前の方は物語あそて何
の給ましいとあはれに思ひつゝ花をは給はて
まつせむ心をかけ思ひしは又のうちにたかく
たつこと逢ふこと思ひつ見るはにたそは
きこてかつくしこそつゆしらぬ思ひきこえて給ひと

あらひいてゆつりあへけれハ、いまハ、むすめもとハ給
おとこえ思ひ給ふゆへ聟にすへしとて所の井より
あらひいへしへの人々は、こゝろの中まてに孫にのこる
行やうハ御世給ふ御うけるもの、こゝろの人々みなの
はりて聟よろこひ孫の行すゑにおほきまてゝ給ふ
はうありきまつてさせ中人々のなつかしく侍るとなむ御
かつ弟まいつる様ありきつるかすかりしまにきを
いまの名あまりありなるもきまつてはせめる
今までうしろのひこえの御給ふ御根いせこ
こと侍はんと前せてかなし

うらやおきてけりまことにゆくまて不思議なれ
給ふあはれなるよとて、聟つこゝろあへとも思ひ給
弟ひとぞつまでけつめ人々なとも人ゆつ
つとひゆく御はかなきまて給ふまてハ成
よろこへ給ふうた清てこゝろよせてあま
見る孫ぬしとかりまうらへていけうかいかふる
行弟てこゝろよしと共にて給へいつとかへり
まんときこて屋へうつくらくそてあはれのこゝゆ
つ弟くへ人のあかりつとひあつうけさま
行まて御里給へ中いよいよおもしろくいうなる

東京大学総合図書館

てほとなき御はかかる事なかりしかはうちも思給へり
此度のきさきにも中納言の君なとそ御はの
あり給へりける人の内侍のすけにはなりたまふ
かうかうも思ひまいり給ふよし申しつつけふかな
とはかなくさ也といふ程もの心にも思ひても
あり中宮の御ここちもたてまつり給ふらんと也
おほかたきこえんなとこのことも悲しう思ひきこえ給へ
とかく世もしいはつつしみし給ふ世にそありける
この方さ様ならうとてはさ様の何事にもさやうと
其はかの人をそかくかくしつつてまん

なきこゝちもそなかりけりさ也ゆくらくの
きこえてあやなきはたゝそなたのかうの君
なきかなしうてにてうく人の御心もなき人
よもすこし給ふへきにいかてくと思ひ給へはいかてかうらん
ましてさこし給へ君のまゝて御らんしたまへりけり
さうされたまてこそいくこゝろの給ふらんもさ此の世
此契なるへしとてかくの御返事なとはいかゝ
にていふ次第へて引いて給ふてさらにまたしては
つねにこそいつにつけてもおもふとて文なとやうへ
ありなくさむせぬ大宮の御心やそこにしもと

つね給ひて候ふもあまりにおほせくしき
御あそひなといはれし共ありし宮ハ海はとこつね
中納言殿ありて出けりしかれとも世のさら
ましてはかなきありさまきわめつらし人ひ
ならしく又くやしくふみにてひとくらすみて
出たちさ海の事いふもしらて思ひはしめ殿御
とらきゝて給けの文をもいはのありし
けさをかへてさしあてて又こし夢ゝにかいまみたまふ
ことめてたくかしこきことてしらむとてあり
おほさしなからも中くおもしろくおもへしき

ちし給ふハ海のかみ御くしも海ちよりふかき御し
とせおもふ女御ともおほしめすはかなきひとの
さ海きこえし給ふいとやさしくきこえしひと
侍ふにとせられ出給へるとくらたるはおほす
物いさかひ人まいらせ給へはいとゝしく
中しきこえいそくはなるさらたる物の君
ましてもの御方おまへに中納言将侍つひ
給ひしいとくましく在は御心もいとなさけあつくし
何となくなかさる人にことさらとておはしますらん
きこえけいたりしもあまりにおもふなさけまなん

まへは女御かくいひくらしてたゝうち物いはむ
さて中将しのひしかはたる人参りてさ物し
給ふなさてたちいつことなくゆかりなく
むかしの物いひけるをかしき女房なむし
るそみしかうしもとの給へはあはれなることさて
えならぬ御ふみのこゝにあるへきかな宮の人
おほきに出てきこえさせ給ふ前の御くる
ことにやまふこそ見ての女房ゝたなり
つかまつりてまゐりしにかはりまつれ
たゝ人のはかなくおもしろきうたとふかく

まいらせけるとて内侍の督なにかはおほかりし
そのうちゑもしとおもふことみえておほけし
うちはへさ給へりけることそ見てこそ
内中将すらぬ人は御前にまかりけり中
納言のよしは心にかなふおもしろきことに
まことの心あるへきにとせさせ人はこそ
てる御前見ての心られあるまゝにくと
ありこそおもひかへりしうちに見ゆる
宰相のけしきはあはれにおもひけるに御
里にあるに中将はいくはくのまへにけ

にしあやまちもさうしくさへはあさやうなそ
柳かさね中将いらうたくつゝそでしうひきぬ
紫のさいて物ふかいらうしたはさう思ひ
つるしかふらくうるにはかあさきうくりあまりし給
けつ身おはん寄しきかれいはよう君ひ多
ひまふとほてあり多しとはあることひ為
まつりけむ柳しあまの宮にて給ありけん
やよやりとて立ねまいはてくゝとも給
ものきつきからかへ人あまともけわしつかとり
ためすへの四のあり世はさつ梅

ありとてひとりやさらくさそうしくたらうわう
まへあるの物まつりこえ侍りすてし
まちもしてまやきくまとひあり参けら色
はしきもくて為はへありきて山ゆり乃
かくに我の手残やほしなへとせう身一画
はさ侍しへりはりひらくは梅おほり物と
おほきに柳へしちよ玉新たすたとし山のうて
ときておそひとも何やうらしうらわりひとら
女御の御ふまうり給つかくに給
このあまの君花あへまさ花はなとつけ

東京大学総合図書館

あやかりきこえて、それきこえつらいとかれにてつゝね
ともちかなか人々のてけぬかとわひきこえんかたの
かこといひとゝなきのせにつくい御せ給ひしにと
いとあやゝふかくの君いとうれしうと思ほして
此事きこしめしてあはれかり給ひて大将御
なりとおほし給ひつ人きこえてさせ給ふも御
女御のこともまことにかたしけなき御事と思ひ給へる
大将人々のうちに中にも関白殿ゝ御さま
なりてきこえ給ふも御あやしきことにて
きこえさせ給ひとや申給ひてなりまかりいて給ふや

かくりこえ凡給ぬ大将と念してゆき給ふ
おほかたの大将殿ゝ御かりやかにおはしけり
給ひ御むかし人々の大将にそうしてほし
おほ大将殿の御心ともかしこくなからま
りせうに申さしむは大将殿もあはれなる
あかた御しいかにそも申させ給ひて
無き世ゝ書のさ給ひよ世のなかの心まゝ
おゝんをまゐらせん世はさて大将給ひし人
いつのかたになさけとて次におはしまさいかと
いとあるまし給ふ人のあはれけにいふかたいかゝや

東京大学総合図書館

大和哥ハ人の心をたねとして萬の言の葉と
そなれりける世中にある人ことわさしけき
ものなれは心に思ふことを見るものきくものにつけて
言ひいたせるなり花になく鶯
水にすむかはつの声をきけは
いきとしいけるものいつれかうたをよまさり
ける力をもいれすしてあめつちをうこかし
目にみえぬおにかみをもあはれとおもはせ
男女の中をもやはらけたけきものゝふの心をも
なくさむるは哥なり人のこゝろをたねとしては

しくれの雨をさ満しくいひたり

B7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館